

大阪博物場——「樂園」の盛衰

後々田寿徳

はじめに

大阪博物場（以下、博物場という）¹は、明治八（一八七五）年に設立された、博物館、美術館、商品陳列所、動物園、図書館などを一箇所に併設するいわゆる博物館群である。椎名仙卓によれば「明治前期における博物館の中で、吸収合併することにより総合的な博物館となり発展する施設には、公立大阪博物場をわが国における唯一の例として挙げることができる」とされ、わが国における博物館群の嚆矢といえよう。

博物場は大阪府大阪市東区内本町橋詰町、現在の大阪市中央区本町橋二番地一帯に所在し、桮上衛らによる先行研究の多くは、明治期をとおしてその組織、施設などを拡張したが、大正前期に移転、解散あるいは廃止されたという。³

河原正彦は、博物場が主催したとする『昭和十三年三月二十一日〜二十五日、第二回郷土陶磁器展覧会目録』の存在についてふれ、「少なくとも府立大阪博物場は昭和十三年（一九三八）まで設立の地にあり、機能していたことを示している」とする。⁴

しかしながら管見では、先行研究でほかに当該期まで博物場が機能していたことを証するものはなく、その衰退期については判然としない。

このたび、大阪府立中之島図書館所蔵資料などを調査したところ、博物場の衰退期についていくつかの新資料を得た。それらの結果、博物場は組織、施設などを縮小しつつ、昭和二〇（一九四五）年の大阪大空襲によってほぼ焼失するまで、七十年もの間この地に存在していたと思われる。とくにその所蔵品は同年まで散逸せず、この地に保管されていたものと考えられる。

また博物場を、現代の「総合的な博物館（群）」の初期的存在と単純に捉え

ることは、その一面しか明らかにしないであろう。さまざまな文化施設や娯楽施設、さらには販売や教育施設までを含んだ博物場は、向井正博の指摘するようにいわば当時の「テーマパーク」的な「場」であり、「動物園や庭園、能舞台や四棟の販品室、各種イベントに対応できるイベント会場まで整備した明治時代後期の最盛期の府立大阪博物場は——中略——カルチャー・アミューズメントコンプレックス施設と考えるほうが妥当」かも知れない。

博物場に、黎明期の未分化な博物館の姿を見るより、現代では相容れないと思われる、さまざまな機能を投入されつつ生きながらえた、混沌とした「場」としての特色に注目すべきである。なぜならばそれは未分化であるがゆえに、現代の細分化され合理化された博物館（群）には持ちえない、多様な魅力をそなえているように思われるからである。それは橋爪紳也も指摘するとおり、まさに「文化の樂園」であったといえよう。

以下、博物場の歴史を追いつつ、その特色と魅力の盛衰について考えてみたい。

博物場の設立

博物場の地は旧大阪西町奉行所跡であり、慶応四（一八六八）年より大阪府庁が置かれていた。明治七（一八七四）年、府庁が新庁舎に移転した後、博物場の開設が企図された。

その内務省への開設願には

府下方今ノ景況人心稍進ミ、四方物品ノ来輸スル亦漸ク加ル 然ルニ巨商豪戸多クハ物品ヲ深蔵シ、互ニ得意ノ取引ト称シ、彼地ニ産スル物ハ此家ニ非ラサレハ来サス、此家ニ出ツルモノハ某地ニ非サレハ不輸ノ風習自ラ蟬脱シ難シ

是レカ為メ外来ノ商客一般ノ物産、源質ノ善惡、品位ノ精粗、直下ノ高下博ク比較ヲ取ルニ便ナラス

故ニ彼我共ニ旧ニ安シ、新ヲ追ヒ、精ヲ競フノ情ニ乏シ 商估進歩ノ道ヲ塞キ候条、博物館ヲ創立シ、各地ノ物品ヲ蒐集シ其原由価値品名等一目ノ下ニ瞭然タラシメ、其精粗ヲ品評シ、其価直ヲ審定候様相成候得ハ府下人民ノ勸業ノミナラス、四方来客ノ便利モ不少―後略

とある。「当時の地方博物館は―中略―その多くは殖産興業政策の地方機関としての性格を持つものが多く、内務省の行政指導や許認可を仰ぐ立場にあった」とされるように、江戸時代よりの商業都市であった大阪の、前近代的な商習慣などを排して、その勸業さらには観光拠点となることを目的とするものであったことがわかる。

翌明治八（一八七五）年四月二日の「大阪博物館開設ノ件」⁹には、「此ニ設置スル博物館ノ旨タルヤ、獨百物ノ奇觀ヲ以テスルニ非ス、各地ノ物産品位ノ精粗直価ノ昂低博ク比較ヲ取ルニ便ナラシメンヲ要ス―中略―府下売買交換愈盛大ナランヲ期スルノミ」とあり、詳細な「大阪博物館概則并條例」が定められている。これらを通覧すれば、博物館がいわば勸業のための商品展示場に、博物館的機能を併設した施設として計画されたことが明らかである。

博物館では会期を百日間とする「大会」、および会期一日と思われる「小会」が開かれる。大会、小会とも観覧は有料とする。

会場は「商品場」および「名品場」に二分され、それぞれ「天造物」「人工物」「古器物」に分類される。商品場では「総シテ日用売買ニ係ル品ヲ陳列スヘシ」とされ、展示用のガラスケースやガラス棚が貸し出された。名品場は「諸人ノ

愛蔵スル内外古今ノ物品」を展示し、展示に際しての造作などは出品者が行なうものとされた。また大会では動物、草木などを別会場で展示することも可とされた。展示品の注文や商談は、博物館が出品者に取り次ぐとした。

出品者は、「内外人ヲ論セス」、展示物を「買物」または「所蔵物」、および「大会のみ展示」あるいは「大小会ともに展示」に区別しなければならない。買物とは「廣ク觀客ノ購求ニ応スル為、遠近ノ商估各自所持スル物品ノ見本ヲ顯ス物ヲ云フ」とされ、その展示には展示料が必要となる。必ず価格を明示し、外貨表示の場合は米国ドルとし博物館が英訳する。所蔵物は「諸人ノ愛蔵スル珍奇ノ品ニシテ、尋常訪問ノ物ト異ナルモノ」であるが、販売することも可とされた。展示料は無料だが販売品の展示は有料となる。

展示物には機械、動物、草木はもちろん、果物、野菜、茶、紙、煙草、砂糖、生糸、真綿、綿麻、鉾石、木材、植物油、模型までも含まれている。驚くべきは展示される「禽獸蟲魚草木等生キタル物」の管理を、博物館が引き受けるとしていることである。

このように博物館は、およそあらゆる物品を展示、販売可能な場として計画されたのである。「諸人ノ愛蔵スル珍奇ノ品ニシテ、尋常訪問ノ物ト異ナルモノ」も展示されたのであろうが、博物館的、教育的な性格は希薄であり、純然たる商品展示場といわざるをえないだろう。

これらは一見してわかるように、明治十（一八七七）年より始まる、後の「内国勸業博覧会」を髣髴とさせるものであるが、博物館のコンセプトは桎上衛も指摘するとおり、明治四（一八七一）年より開催された「京都博覧会」の影響が大であろう。「京都博覧会」は民間主導により始められ、後に京都府も後援したという。西本願寺、御所などを会場として明治二〇（一八八七）年まで毎年開催されたらしい。

博物館が注目されるのは、「京都博覧会」「内国勸業博覧会」に比して、当初より恒久的かつ専用の展示場を有していたことであろう。また展示や販売などについて、細かな配慮がなされていることも見逃せない。このただ物品を展示させるだけではない、出品者と（観）客とを媒介するエージェンツ的な機能は、この後の博物館の性格を決定づけるものといえる。

博物場は明治八（一八七五）年九月十日より、初大会を開催予定であったが、¹¹ 実際は同年十一月一日より十二月十日に開催したらしい。「参考品」として府下の寺社や諸家の所蔵品も展示されたという。¹² 翌明治九（一八七六）年の入場者数は三九、五七〇人とされる。¹³ 当時の大阪四区の人口は三〇万人ほどであったので、相対的に少なからぬ入場者数といえよう。明治十（一八七七）年には大会の会期を一三〇日間とし、小会を十月一日より十一月二十九日までとした。¹⁴ 同年、名古屋城の金鯱を借用展示したという。「各校生徒并女紅場生徒」などは無料で縦覧させたりした。¹⁵

なお開場当初、その運営費は「経費は元資として府税金より買得したる公債登書の利子及び縦覧人より徴収せし通券料を以つて之れを支弁したりき」とあり、¹⁶ いわゆる財団経営であったことも興味深い。

発展期

明治十三（一八八〇）年、博物場は大阪市江戸堀南通にあった府立勧工場を併合している。勧工場は、明治十（一八七七）年開催された第一回内国勸業博覧会に出品された商品の売れ残りを販売する目的で、東京府が翌明治十一（一八七八）年に開設したものが、わが国最初のものであるとされる。大阪府立勧工場は同年八月設置され、翌明治十二（一八七九）年竣工開場したという。¹⁷

「勧工場設置及規則」によれば

当府下製出ノ品類使用ノ便ヲ謀リ、工作ノ精ヲ極候トモ需求者品等較現評価ノ便ヲ闕候ヨリ、粗製濫造、從テ品価ヲ墮シ候ハ遺憾ノ至ニ付、這回供需隻功ノ便ヲ謀リ―中略―勧工場ヲ設置シ、管下ノ製産ヲ蒐集一堂ニ羅列シ点検開引ノ具ニ供シ、内外需求者ヲシテ一目瞭然精粗鑑別ノ便ヲ與ヘ、從テ工芸ノ精巧ヲ振作シ販路ノ拡張ヲ要シ候旨趣ニ候

とされ、府下の製造業、工芸産業の振興を目的としたものであったことが知れ

る。入場無料、出品物を直接販売していたこと、「出品物ハ当分動植物」を除いていたことなどが異なるが、ほぼ博物場の機能と重なるものである。したがって「博物場と共に府勸業課に属し、二者の目的性質は殆ど同一であった、¹⁹ 十三年六月三十日之を廃止し陳列品を悉く博物場に移した」という。

陳列品すなわち商品の移動とともに、展示物の直接販売という機能を博物場が新たにそなえたかは不明であるが、商品展示場としての性格をより強めたことは疑いなかろう。

また明治十四（一八八一）年には、博物場は府立教育博物館も併合している。

この教育博物館は、明治十（一八七七）年、東京に開館した教育博物館に倣ったものとされ、²⁰ 「教育上必要ナル物品ヲ蒐集シ、教育ニ従事スル者ノ便宜ヲ得セシメ、且公衆ノ縦覧ニ供シ学事ノ進歩ヲ徴セシムル為メ」²¹ 設立されたらしいが、勧工場と同じくわずかな期間しか存在しなかった。明治三六（一九〇三）年に、同館について次の記述がある。

而して教育に関する各種の品類亦少なからざりしかば十一年五月第四大区五小区常安町十八番地に府立書籍館と相隣りて教育博物館を開場せり陳列品都べて九百十有個、敢て多大なりといふを得ずといへども当時社会の狀態奇を求め珍を樂み改善に急にして好奇心の勃興に際したるを以つて来たりて之れを觀るもの一箇月平均二千人を超ゆるの盛況を呈し、しかも是等縦覧者の腦裏には他日教育上の諸關係に發揮すべき材料を與へ得たるや明かなり。―中略―然るに同十四年に至り其の所在地を師範学校地に充つるに際し遂に之れを本町橋詰町なる博物場に合併し一室を分かちて之れに充てしかば、爾來博物場の盛衰に伴ひ縦覧者の増減ありしといへども之れが拡張の期を失し且一般商工業の発達により博物場の拡張に壓せられしを以つて三十年に至り一時之れを廃止せり。爾後今に至るまで此の種の施設を見ず、洵に遺憾なりとす。²²

埜上衛は、博物場は開場当初より小学校などの生徒參觀が恒例であったこと、府は明治十五（一八八二）〜十七（一八八四）年の間、博物場を「教育博物館」

と称したことより、「教育博物館を合併した当初、本場の学習を援助する面はかなり強かったと想像される」とする²³。しかしながら椎名仙卓は「大阪府年報には一略—教育博物館ハ縦覧人ノ寡ナルニ依リ本年度假ニ公立大阪博物館構内ニ移シタルヲ以テ一略—本館ハ備具少ナク資金乏シクシテ将来維持ノ法ニ苦シミ一略—とあつて、経済的な理由など将来の見通しがたないことを挙げてゐる。合併後における教育に関する資料は、一室充てがわれただけで次第にその影がうすくなる」としており、²⁴「一般商工業の発達により博物館の拡張に壓せられし」と嘆いた教育博物館はその性格上、博物館にとつて招かざる客であつたとすべきであろう。

さて、この時期博物館では数々の会が催されたと思われるが、そのうち注目されるのがさまざまな「共進会」であろう。共進会とは、産業振興を目的とし、産物や商品を展示して出品物の優劣を競うものであり、それらの表彰なども行なわれた博覧会の一種といえる。明治十三（一八八〇）年に博物館で開かれた「綿糖共進会」は、大阪初の全国規模の博覧会といえるものであり、当時輸入過多であつた綿糖の国内生産を振興するものであつた。²⁵

また、明治十六（一八八三）年には「関西府県連合共進会」が開催された。この会には大阪府のほか十二県が参加し、織物、生糸、繭、綿、紙の五種の産業をテーマとしたものであり、やはりそれらの国内生産振興が目的であつた。²⁶明治十九（一八八六）年の「物品共進会開設ノ件」は、その目的を「各自ノ業務ヲ競進セシメ、物品ノ品位ヲ進メ其産額ヲ増シ、以テ輸入ヲ防キ輸出ヲ盛スルノ旨趣ニ候條」とし、出品物は次のように区分された。

硝子（飲食器・雑器）、摺附木（輸出入・内地用）、石鹼（化粧石鹼・洗濯石鹼）、莫大小「メリヤス」、蝙蝠傘、扇子（輸出入・内地用）、団扇（輸出入・内地用）、輸出入物（金属製品・木竹製品・右ニ属セサル製品）、晒蛭、刻昆布²⁷

翌明治二〇（一八八七）年の「舶来模造品共進会」の講評には「概して之を言へば、其形状を模して其精神を写さず。譬へば杵を造るもの未だ嘗て足、杵

を穿たず、衣を裁するもの果して能く衣を着るものに非ず、故に或は之を見れば不可なる所なきも、之を用いて始めて其格に応せざるを知る」とあり、当時の状況をうかがわせ興味深い。

さて、博物館で開催された異色の会としては、明治十七（一八八四）年十一月の「絵画品評会」があげられる。明治十五（一八八二年）と、同十七（一八八四年）年春の二回、農商務省を中心に上野公園において開かれた「内国絵画共進会」の影響下に企画されたという。²⁸

同会は「本邦従来ノ習慣タル絵画ヲ以テ一場ノ遊戯娛樂ノ玩具ト為シ、教ウル者モ学フ者モ悠遠高尚ノ志望ニ乏シク、其造詣スル所亦甚卑クシテ、本邦特異ノ美術モ漸ク將サニ消滅セントス」現状を憂いて、「益此技ノ競争進歩ヲ謀ラントス、此道ニ従事スルモノ宜シク従来ノ陋習ヲ破リ各派親和ヲ以テ益美術ノ振作ニ注意スヘシ」とする公募展であり、いわゆる伝統的な日本画の振興を目的とするものであつた。

画工の守住貫魚、上田耕沖、十市王洋、水原梅屋、森琴石らによる「本邦派二百十六枚、支那派二百五十枚、参考古画三十幅」が展示された大掛かりなものであつたという。³¹もちろん、「内国絵画共進会」も含め、この当時の「絵画」はあくまで産業としての「美術工芸品」の一部であつたことは、注意しておかねばならない。しかし、各種共進会における純然たる産物や商品展示とは異なり、「参考古画」も含めた絵画品評会の開催は、後に博物館に「美術館」が建設される契機となるものであろう。

また、博物館は明治十五（一八八二年）ころには「東京博物館より借用の水牛二頭をはじめ、羊、鹿、猪、熊、狸、鴨、家鴨、鴛鴦「おしどり」、子鳧「こがも」、鶴、孔雀、鳩、インコ、鷹など八九十種の鳥獸類を收容飼育してゐた」という。³²これらの多くは先述した「大阪博物館概則并條例」にある「禽獸蟲魚草木等生キタル」出品物すなわち商品であつたのだろうか。

博物館は後の明治十七（一八八四年）年に動物檻を設置したという。³³「大日本大阪博物館図（明治二二年・挿図一）」³⁴には場内右手に檻のようなものが描かれているが、詳細は不明である。



挿図1 大日本大阪博物場図（明治22年）
（『東区史 第一巻』より）

明治十九（一八八六）年ころには、敷地を拡張し、事務所や物品陳列室数棟、商標観覧所を増築したらしい。³⁵

先にふれた博物場内の「美術館」は、明治二十（一八八七）年二月着工し、翌年十月に竣工したという。³⁶ 建坪一九八坪、工費九、六九〇余円を費やした煉瓦造の豪華なもので、張天井の壁画は先述の「絵画品評会」に参画した上田耕沖と櫻井香雲ほかが担当したらしい。³⁷ この美術館は、明治十（一八七七）年の第一回内国勸業博覧会の煉瓦造の美術館および、同十四（一八八一）年の第二回同博覧会のコンドル設計による美術館に続くものと思われ、それらが同十五（一八八二）年以降「博物館」に改称、転用されたことを考えると、恒常的に「美術館」と称した施設としては当時わが国唯一の存在であった可能性がある。

「爾後本館は本市に於ける唯一の美術館として市民の芸術に対する知識を啓発し、美術工芸の発達を促す源泉」となったとされる。³⁸ さらに明治二一（一八八八）年には大阪府書籍館を併合し、場内に図書室を設けたという。³⁹ 注意したいのは、これら「美術館」「図書室」の設置は、先の「動物檻」とともに、博物場の性格に変化をもたらすものであったであろうことである。すなわち、「殖産興業」目的のいわば「商品展示場」より、「娯楽・教育」目的の複合

施設への変化である。橋爪紳也によれば、これは明治十八（一八八五）年より同二二（一八八九）年まで博物場長をつとめた、天野皎によるところが大きいとされる。

天野は東京高等師範学校を卒業後、大阪師範学校で教職に就いた後、神戸師範学校長をつとめたという。大阪商法会議所を経て大阪府官吏となった。博物教育や美術にも造詣が深かったらしい。天野には「西欧文化」を主題とする〈楽園〉、現代風に言えば一種のテーマパークに、博物場を改造しようとする意図があったのかもしれない」という。⁴⁰

天野らに指揮されたこうした明治二十（一八八七）年ころ以降の博物場の変容は、そのライヴァルの誕生、すなわち「大阪（府立）商品陳列所」の設置の影響によるものと考えられる。

大阪商品陳列所と博物場

明治二二（一八八九）年、第六代大阪府知事となった西村捨三は、外国貿易商によるいわゆる居留地貿易の現状を憂い、新たな貿易斡旋機関の設立を急務とし、諸外国の同機関すなわち商品陳列所や博物館などの調査を行なわせたという。⁴¹ 一説にはベルギー・ブラッセル商品陳列所を参考とし、同年十月に大阪商品陳列所の設立を決定した。その概要は同規則書によれば次のとおりである。⁴²

目的、本所は主に我物産の輸出を増進し又外国品を輸入するの便利を図り

兼て内地商業の発達を助け府下の工業を拡張改良するを以て目的とす

商品陳列、商品陳列を別て左の三部とす

甲、輸出品参考部（略） 乙、輸入品参考部（略） 丙、内国製産見本部、

本府下及各府県下出品人の請求によりて内国製産見本雛形原資等を陳列す

荷造法参考室、各種荷造の見本雛形図書用品等を陳列し其実物の寸法容量

其他運搬法等重要事項を附記す

広告室、商工業に関する広告類を掲示せんとするものは其宿所氏名広告の事柄尺坪数揭示日数等を具して申込をなし本所の承諾を受くべし（略）
図書室、商工業上緊要の参考図書を備え置き縦覧人の閲覧に供し又相当の見料を徴して貸渡すべし

報告、陳列品の説明を掲げ又中外の新聞雑誌報告等に就き当業者の参考となるべき事項を抜粋して定時又は臨時に報告書を発行すべし

臨時縦覧会、必要なる場合には場内又は場外に於て臨時縦覧会を開設すべし
分析試験、化学的商品其他鉱物等の分析試験の依頼に応じ化学的諮問に応じ以て工業の改良を助長すべし（略）

陳列品貸渡及分与、陳列品は府下当業者に限り之を貸渡し又分与することあるべし（略）

縦覧、毎日午前九時より午後四時まで公衆の縦覧を許す（略）

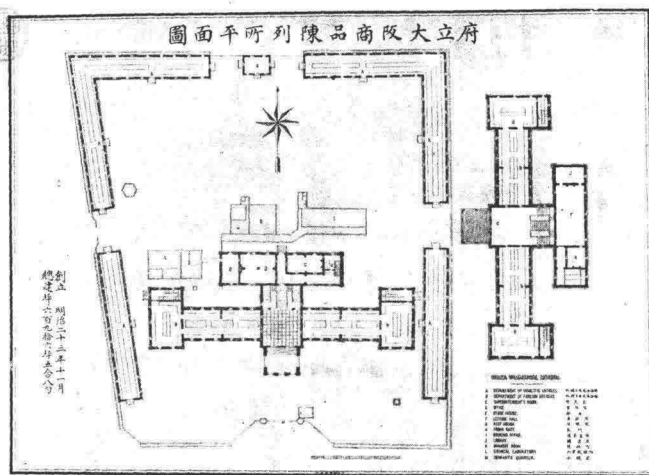
明治二三（一八九〇）年二月、大阪商品陳列所は北区堂島浜通二丁目（現在の北区堂島三丁目田養橋北詰）において着工され、同年九月竣工、十一月十五日開所した。

開所式において西村知事は、明治以降凋落した大阪経済の現状を指摘し「今日は全市民総掛りの水道工事二百余万円にキュー／＼云ふとは情けなきことならずや」としながら、「本陳列所の如きは外国貿易にとり恰も地図の如きものか、羅針盤の如きものか、地図なくして遠征を試み、羅針盤なくして航海を試みるは危険の至りと謂ふべし、今や地図あり羅針盤あり、当業諸君、切磋講究或は進み或は退き若しくは右し或は左し、掛引運用の妙に至りては一身の存する所に在るべし——中略——能く陳列所の効果を収め併せて全国商業者の参攻「ママ」とならんことを切望の至りに耐へず」と挨拶した。⁴⁴

総敷地面積二、三七五坪、陳列所建坪二、三二坪は博物館と比してさほど大規模ではないが、建設費や諸経費として四一、六五九円余を費やした同所は、⁴⁵当時最新の機能、設備を備えたモダンなものであり、「海外及び内国陳列品千七百七種、外国より寄贈品百二十五種其の他荷造雛形四十一種、通信省より下附品十二種、同所調製品四百三十七種其の他種々の見本等」が展示された



挿図2 大阪商品陳列所報告 第一号（明治23年）



挿図3 府立大阪商品陳列所平面図（明治34年）
（『府立大阪商品陳列所十年紀要』より）

という（挿図2・3）。

翌明治二三（一八九〇）年には所内に電話交換機雛形を設置、庭園内には「假山擬水」を築造して世界地図を造り、各国地理の参考にした。⁴⁷

このように商品陳列所は、その商品陳列所としての機能、設備すべてにおいて博物館を凌駕するものであった。当時博物館の活動が明治初期の「手工業」的な内国産業振興に留まったのに比し、商品陳列所は「分析試験」や「電話交換機」など、当時の最先端の技術も紹介することで、より近代的な工業、産業の国際的な振興を目指したことは明

らかである。

明治二四（一八九二）年に、商品陳列所についての興味深い評が新聞に載せられている。同所を「日本に於て商品陳列所設立の嚆矢」とし、「陳列の方法も甚だ宜しく評判悪しき方に非ず」としつつも、「其の陳列品を見渡すに内国製造品割合に少く外国品は遠く欧米諸国を始め豪州其の他南洋諸島、印度、支那、朝鮮等の出品の多数を占め居れば先づ其場内に入る時は外国品の参考となるもの多くして却って手近なる内地製造品の種類を見ることを得ざるは甚だ遺憾の至りなり」とし、外国商品の奨励に繋がりがかねない危険性を指摘するものであるが、同所の性格や当時の評判を的確に捉えたものといえる。⁴⁸

商品陳列所開所によつて、博物館は国内的な商品の紹介に限定され、その商品陳列場の機能を漸次低下させ、「娯楽・教育」目的の複合施設への移行をより明確にしていたのである。

事実、同時期の博物館では、「古美術展覧会（明治二十三年）」⁴⁹「本邦古今衣類織物展覧会（同二十四年）」⁵⁰「美人画、楽器展覧会（同二十五年）」⁴⁹や「全国醬油品評会（同二十七年）」⁵⁰「写真展覧会大阪支会（同年）」⁵¹などの、いわばローカルな展覧会、品評会を開催している。また日清戦争における成歎・牙山作戦の戦利品の展示（同年九月）を場内美術館で開催し、一日数万人の観客が訪れ、「同博物館設立以来なき混雑を極めた」という。⁵²

このように博物館では、美術館と物品陳列室などを併用しつつ、多種多様なイベントを開催した。なお、明治二三（一八九〇）年の明治皇后行啓の際に場内に休憩所として「錦繡堂」が建設され、茶室も附されて集会場として利用されたという。⁵³明治二八（一八九五）年発行の観光案内『大坂けんぶつ』に、当時の博物館の姿が簡潔に描かれている。

場内に数棟の売店あり定価を以て諸物品売捌けり表門の正面には美術館あり構造美麗壯観にして古画、古器物、新製美術品等を陳列して縦覧せしむ、また時々こゝにて美術に関する諸般の展覧会あり館の周囲には諸種の樹木繁茂して花笑ひ鳥歌へり場内別に動物園の設けなければ美術館の南に熊、鹿、狐、鷲、鴛鴦等種々の動物を飼養せり、東方入口の北に能舞台ありて

ときどき能楽または狂言尽しの催しありまた錦繡堂と云へる室あり——中略——入場券は一人につき金二銭にて一年中一日も閉場せず但し開場時間は日の長短に依りて少多「ママ」の伸縮ありと知るべし。⁵⁴

またこの時期に注目されるのは、平瀬露香（亀之輔）の博物館長就任である。平瀬家は大阪を代表する豪商であり、露香は明治期の大坂財界の重鎮であった。しかし露香は商売には重きをおかず、趣味や遊芸の世界に生きた文化人、すなわち「近世大阪の旦那衆そのもの」であったという。⁵⁵露香は明治二四（一八九二）年に「日本美術協会大阪支会」支会長となり、翌明治二五（一八九二）年八月より同二七年（一八九五）十月まで博物館長をつとめた。⁵⁶露香の博物館への影響は明らかではないが、能楽への深い関心から、一説には当時中之島にあった能舞台「緑柳館」を、この時期に博物館に移転したとされる。⁵⁷さらに場長辞任後も、明治三一（一八九八）年にこの能舞台を改築した際にも関与したと考えられる。⁵⁸明治時代の演能は大坂博物館長であった平瀬露香亀之助らの努力で、抛金の上にてできていた博物館の能舞台を唯一の頼み」としていたという。⁵⁹

露香は財界人との交流はほとんどなかったが、「胸襟を披いて話す人はなかつた、只一人——ほんの只一人——町田久成（号石谷）があつた」とされ、「此人とは趣味も合ひ意見も統合して氏の豊富なる蘊蓄には如何な翁も一目置いて敬服して居られた」という。⁶⁰

町田久成は、薩摩藩島津久光の重臣であり、わが国最初の恒常的な近代博物館である「(上野)博物館」初代館長である。同館開館直後の明治十五（一八八二）年、政争により失脚し、同二二（一八九九）年、園城寺にて出家、同寺末光淨院住職となり、以降滋賀と東京を往復したという。⁶¹町田は明治二九（一八九六）年ころより体調を崩し翌年没しているため、平瀬家が島津家御用であった縁からか、まさに露香が博物館長であったところに交流があったと思われる。

その交流の内容については知る由もないが、博物館建設に情熱を注いだ町田と、露香が博物館について語り合ったこともあったのではなからうか。

一方、商品陳列所では、明治二七（一八九四）年一月、平賀義美を所長に迎えている。平賀は福岡出身、大学南校に学び、福岡黒田家により明治十一

(一八七八)年イギリスに派遣され染色を学び同十四(一八八二)年帰国した。東京職工学校、東京帝国大学教授、農商務省技師を歴任した、明治期化学者の泰斗である。⁶²

平賀は化学、工業の専門家として、商品陳列所の一層の発展と近代化につとめた。すなわち、『通商月報』を発行し広く関係機関に配布、英文パンフレットを作成し諸外国へ同所を告知するなど広報活動を強化した。また、先述した「外国製品偏重」への批判に対し、附属内国製産陳列館を設置し自由販売を奨励することで、利用者を増加させて同所の認知度を向上させたという。さらに工業技術者による交流会、研究会などを同所で開催して、府下の商工業者を指導した。明治三一(一八九八)年には農商務省の委嘱により欧米を調査視察し、諸国との通商関係を強化したことなどにより、同所は府下のみならず全国から利用されたとされる。⁶³

平賀は明治三七(一九〇四)年三月まで同所所長をつとめたが、大阪樹脂製造所、大阪織物会社、東洋木材防腐株式会社、日本火山灰株式会社などを興し、関西商工学校校長、大阪高等工業学校評議員も歴任した。大阪商工界への影響はきわめて大きく、「当時の陳列所は千客万来で——中略——新興産業の創意工夫のメッカであり、平賀は大阪の〈知恵袋〉であった——中略——当時の大阪における経済技術の指導にはなくてはならぬ人物であった」という。⁶⁴

このような同時代における「近世大阪の旦那衆そのもの」平瀬露香と、「経済技術の指導にはなくてはならぬ人物」平賀義美という対極的な二人の長の存在は、博物館と商品陳列所の目的、性格の違いを象徴するものといえるだろう。

商工、実業界における華々しい商品陳列所の活動の陰で、明治三十〜四十年代の博物館は着実にその「娯楽・教育」的性格を強めていった。明治三二(一八九九)年に庭園に泉水・築山を増設、⁶⁵同三六(一九〇三)年には天王寺周辺で開催された第五回内国勸業博覧会に便乗した「余興動物園」に展示されたライオン二頭のほか、虎、象などの動物を購入、動物舎などを漸次拡大したという。⁶⁶一説には明治四二(一九〇九)年にドイツよりさらにライオン二頭を購入したとされ、⁶⁷また同年セミクジラの全身骨格標本の寄贈も受けたい。⁶⁸

明治三七(一九〇四)年五月一日に改定施行された「府立大阪博物館規則」⁶⁹に

第一章 総則

第一條 本場は美術品、工芸品、天産物、動植物及図書等を公衆の観覧に供する所とす

第二條 本場は美術品、工芸品の品評会、展覧会又は書画、音楽、抹茶、插花、花卉、盆栽、魚鳥会等を臨時開設することあるへし

第三條 前條の諸会は本場の許可を受くるときは何人にも開設することを得

第四條 本場は別に商品館を置き物産の進歩を促すに足るべき物品の販売を為さしむ

(略)

第七章 土地利用

第四十四條 売品店又は休憩所等を設置せんと欲するものは第五号様式に依り本場に出願許可を受くへし

(略)

とあるとおり、博物館主催事業および貸会場事業を行ない、現在の美術館、博物館あるいは文化会館的な複合施設としての機能を果たしたことがわかり、明らかに勧業的な性格は後退している。

当時の博物館は、「数棟の陳列所・売店・茶店・能楽堂・動物園等を以て構成され、園内に花樹を植へ、一つの遊覧所・娯楽場を形成してゐた。当時公園らしき公園を有せず、倶楽部らしき倶楽部を有せざりし大阪人に対し、唯一最大の楽園となり、春秋二季の美術館の展覧会、時々の共進会陳列会は勿論、四時の花に憧憬れ来る老若、山野の動物を喜んで来る子女等群を成し、その他鶯の会、繡眼兒「メジロ」の会、金魚の会、朝顔の会、牡丹・菊の会、抹茶の会、琴・舞の温習会、素義「素人義太夫」会等こゝに持ち込まれて賑ひをなし、同場は市民の利便と悦楽との為に大きな役割を演じてゐた」とされる。⁷⁰

明治三七(一九〇四)年以降、一部入場無料とされたこともあり、同年の入場者数は四四二、四六四人にもなげ、開場当初の十倍以上となり、同四一(一九〇八)年には入場者が八五一、〇〇〇人を超えたという。⁷¹大正二

(一九一三)年の大阪市の人口が三八万人ほどとされるので、これは驚くべき数字だといえよう。類似施設が少ないとはいえ、博物館が「楽園」としていに市民に親しまれ、愛されていたのがわかる。

当時の博物館について郷土史家・牧村史陽による貴重な回想がある。

私の知っているのは明治末年(二十世紀初め)のことであるが、その時分には表門を入ると正面に赤レンガの美術館があり、周囲には、——中略——第五回内国勸業博覧会という大阪としては画期的な大博覧会の動物舎を移してつくられたものが並んでいた。——中略——私は博物館の川向の南本町一丁目、明治三十一年に



挿図4 明治大正大阪百景(大正初寫 本町博物館 暉月) 三幸蔵(『大阪市天王寺動物園70年史』より)

本綿問屋の長男として生れた。だから幼時は博物館が唯一の遊び場所でもすれば丁稚やおなごしに連れられて、夕方までその動物舎で遊んだ。入場料は大人二銭、小人一銭だったかしら。川端には古い柳がたくさん植わっていて、川に向つては二段の土堤になっており、あぶないからそこで遊んではいけないとよくいましめられたものだ。⁷³

博物館では明治三九(一九〇六)年に「こども博覧会」、同四四(一九一一)年には「第二回こども博覧会」が開かれており、牧村はこれらも見たであろうか。彼の回想をまさに「絵に描いた」ものが、「明治大正大阪百景(挿図4)」であろう。画中に「大正初寫 本町博物館『喜多』暉月」とあり、初夏であろうか、さわやかな緑をのびやかに描いた、いかにも大正初期の自由な作風である。なごやかな憩いの場の雰囲気伝えるためか、明治三六(一九〇三)年の「府立大阪博物館案内図(図版1)」⁷⁶に比べると、ドーム状の水禽舎が明らかに大きく描かれている。これは同年以降に拡大(移設)されたという動物舎を表すものとも考えられる。その左側(北)にあるべき美術館の姿が見えないのはなぜであろうか。

当時大阪時事新報記者が博物館について、「博物館は美術展覧会又は観商場と為して場内の動物園は之を天王寺公園附近に移転をすべし現在の如き鶴の設備を以てしては教育上にも実業上にも何等の利益を與ふるものではない」と評しているが、まさに「鶴的」であるがゆえに、博物館は教育、娯楽、勸業それぞれの魅力が渾然一体となった、老若男女、職業階層を問わない、大阪市民のための「唯一最大の楽園」であったのである。

大阪商品陳列所の移転と博物館の縮小

博物館と商品陳列所が、いわば「棲み分け」し、それぞれが共存共栄した時代は、明治四二(一九〇九)年七月三十一日に終わりを告げる。同日発生したいわゆる「キタの大火」によって、商品陳列所が烏有に帰したためである。

大正元（一九一二年）十二月、大久保利武が農商務省商工局長から第十五次大阪府知事として赴任した。大久保は欧米留学経験もあり、通商貿易に関心が深くその振興に尽くしたという。⁷⁸ 大正二（一九一三年）十一月の府会において、大久保は失われた商品陳列所の新築案を提出し、同三年より五年までの新築予算が可決された。

府会の説明で大久保は、「此ノ陳列所ハ御承知ノ如ク工業試験所ト相俟ツテ市ノ商工業ノ指導奨励に最モ緊要ノ機関デアル」とし、「陳列所ノ位置ハ現在ノ博物館内ニ建築スル計画ニ致シテ居リマス、博物館ハ御承知ノ如ク市ノ中心ニ於キマシテ当業者ニハ最モ便利ノ好イ処デアリマス、而シテ此ノ博物館ノ改善ト云フコトモ多年問題ニナツテ居ルコトデアリマスガ、此ノ陳列所ヲ博物館内ニ設ケマシテ是迄行ツテ居ル所ノ商品改良産業発展ノ事柄ヲ陳列所ニ結び付ケテ陳列所ヲ中心ト致シテ、或ハ展覽会ヲ開キ或ハ品評会ヲ開キ或ハ公買ヲ致ストカ云フコトニ致シマシテ、博物館ヲ一方ニ於テハ整理致シ、一方ニ於テハ陳列館ノ利用ヲ充分ニ致シマシタナラバ相俟ツテ産業ノ指導奨励ニ鈔カラヌ利益ヲ見ルコト、考ヘマシテ博物館内ニ建築致スコトニ致シマシタ」とした。⁷⁹

すなわち、博物館は市の中心にあり、長年人口に膾炙しており利用に最適である。博物館が行なってきた産業振興の機能を、商品陳列所に発展的に統合すれば二石二鳥であるとして博物館内に商品陳列所（以下、焼失したものを旧商品陳列所、新築されたものを新商品陳列所とする）の新築を決定したのである。

ここには多くの市民に愛されていた、当時の博物館の「娯楽・教育」的な機能への配慮をみることはできない。「産業ノ指導奨励」という実利目的のため、博物館は「改善」と「整理」、いわばリストラクチャリングされることとなった。

まず、新商品陳列所建設にあたって博物館の空地面積不足が問題となり、場内で相当の面積を占めていた動物檻などが廃止されることとなった。これには都心における動物の鳴き声や悪臭、猛獣の危険性などへの問題視もあつたともされる。ところが大正二（一九一三年）十二月の府会には「博物館拡張ニ関スル意見書」が提出されたという。これは新商品陳列所を収容するためには同場南側の民有地を買収すれば、「諸般ノ設備ヲ完フスルコトヲ得ベキノミナラズ、動物ヲ他ニ移転セシムルノ要ナカルベシ」とするもので、「動物館ヲ移転スル

ガ如キコトアラバ、同場収入ニ於テ多大ノ減少ヲ来スト同時ニ唯一ノ楽園ヲシテ其実ナカラシムニ至ルベシ」と訴えている。突然の新商品陳列所建設案への府会側の抵抗とみることができよう。⁸⁰

しかしながら、この意見書は否決され、博物館の動物類は大阪市に無代下附されることとなった。こうして翌大正三（一九一四年）年秋、博物館の動物類は新たに設置された天王寺動物園に移管されることとなる。その数量は動物一八一点、書籍五七冊、医療器具八八点、飼育器具一〇八点、建物三棟であつたとされる。⁸¹ また博物館の動物飼育技師も大阪市に移籍したという。その一人が天王寺動物園初代園長の林佐市であつた。林は同年十月十五日深夜に、博物館の象「団平」を、博物館より松屋町筋を歩かせ天王寺まで移動させたという。⁸² 大正二（一九一三年）年の博物館来場者数五〇五、五〇二人に比して、同三（一九一四年）年の来場者数が三二〇、二〇三人と2/3以下に減少しているのは、こうした動物類移転も影響したのかもしれない。

新商品陳列所は大正四（一九一五年）年二月に着工し、同六（一九一七年）年三月ころにほぼ竣工したらしい。⁸⁴ 次にその概要を述べる。なお、同所の設計は同じころ広島県物産陳列館（現原爆ドーム）を設計したヤン・レッツェルであるという（挿図5）。⁸⁵

新築工事概要

- 一、本館 三百七十五坪五合一勺 「様式」復興式 「構造」石材煉瓦混用
- 二階建（略）
- 一、事務室兼図書館 百二十六坪 木造二階建（略）
- 一、発明館 二百三十六坪 木造平屋建（略）
- 一、倉庫 二十七坪五合 煉瓦造二階建（略）
- 一、書庫 十八坪 前同断
- 一、図案館 百八十七坪 煉瓦造二階建旧博物館美術館ヲ修理セルモノ
- 一、附属建物 木造平屋建 小使室、便所、荷解場、渡廊下、夜警員詰所等
- 一、設備 本館一部及図案館事務室ハ何レモ電燈給水及瓦斯設備アリ⁸⁶

新商品陳列所は大正六（一九一七）年十一月一日に開扉式を行なった。「博物場の法規的な終末はなお確めるに至っていないが、大正六年三月の府立商品陳列所の移転再開によつて全く閉鎖されたことは確かであろう」と埜上が述べるように、⁸⁷ 先行研究の多くは、この新商品陳列所の移転開所をもつて事実上博物場の活動は終焉したとみるが、以下再検討したい。

博物場は新商品陳列所新築工事中の大正四（一九一五）年三月に『府立大阪博物場所蔵品目録 第一巻（以下、第一巻とする）』⁸⁸ および『府立大阪博物場所蔵品目録 第二巻（以下、第二巻とする）』⁸⁹ を刊行している。それぞれ総数一四八頁、二八二頁からなる詳細な目録であり、おそらく所蔵品の重要度により「甲乙丙」に分け、それぞれを「書画甲乙之部」「器具甲乙之部」「染織及装束之部」「雑種之部」（以上第一巻）、「古銭之部」「圖書之部」「丙印之部」（以上第二巻）に大きく分類している。総点数は五、六二五点（件）とされ、美術工芸品の鑑定には、古社寺保存会の委員であつた東京の前田健次郎があつて



所 列 陳 品 商 の 前 年 十 三



所 列 陳 品 商 の 在 現

挿図5 （新）大阪商品陳列所（『回顧三十年』より）

で大部な目録をあえて作成したのはなぜであろうか。

『第一巻』巻頭には、『第二巻』までを通した目次が掲げられているが、『第二巻』の2/3を占める「古銭之部」にはなぜか頁数がふられていない（挿図6）。また『第二巻』巻頭にはつぎの緒言が掲げられている。

緒 言

雑 種 之 部		古 銭 之 部		圖 書 之 部	
刺 繍	二〇〇二頁	貨 幣 章 牌	二千六百六十八點	書 讀 本 類	千七百七十四點
骨 格	一三三頁			有 職 故 實	一頁
アール・ヌーヴォー	一四三頁			詩 文	一三頁
臺灣生産品	一四七頁				

第 二 巻 目 次

挿図6 府立大阪博物場所蔵品目録 第一巻 目次

府立大阪博物場所蔵古銭類ハ拾八個ノ箱ニ納メ糸ヲ以テ臺板ニ括リ付ケアリテ種類ノ区別殆ンド無シ今回之ヲ調査スルノ機会アリ新二目録ヲ製作シタリ然レトモ時日ノ余裕ナキ為メ両面ヲ検査セサルモノナキヲ以テ鑑定ニ全然誤ナキヲ保シ難シ此等ハ未詳ノ分ト共ニ他日機会アラハ訂正スヘシ

大正二年四月 甲賀宣政

甲賀宣政は当時大阪造幣局技師であり、調査には原田寅之助も協力したとい⁹⁰う。結論から述べれば、この『第二巻』は、大正二（一九一三）年に甲賀らが刊行した所蔵古銭類の目録（おそらく表と目録の二分冊）に、同三（一九一四）年ころ調査した古銭以外の所蔵品の目録を合本し、『第一巻』と共に同四（一九一五）年三月に刊行したものと思われる。

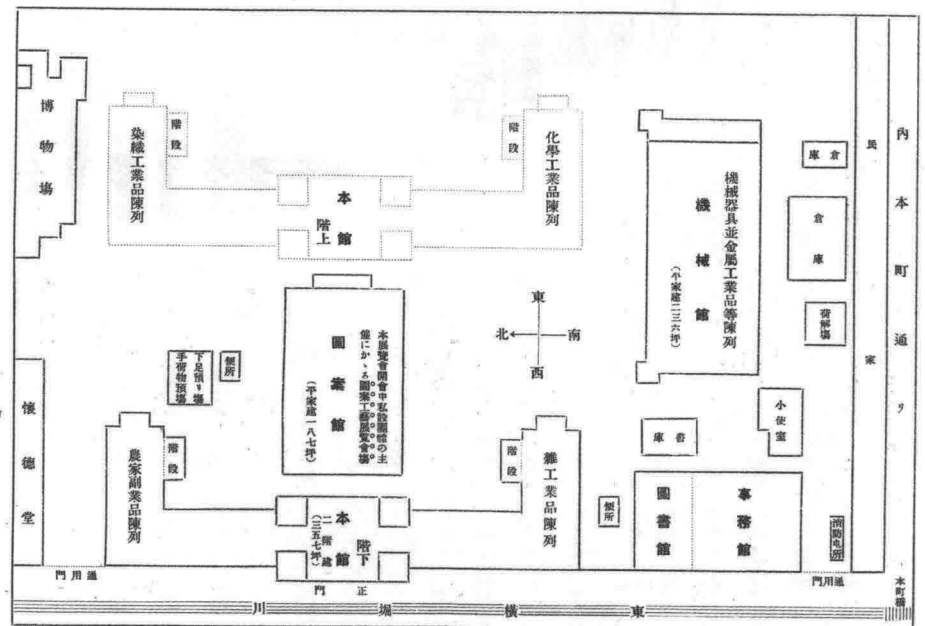
新商品陳列所の移転が決定した大正四（一九一五）年ころに、こうした詳細

別表」が一〇二、および「古銭之部（番号順目録）」が一〇七六、続く「図書之部」「丙印之部」が一〇九四と不連続なものとなっている。また、『第一巻』のすべておよび『第二巻』の「図書之部」「丙印之部」と、『第二巻』の「古銭之部（古銭類金属種類別表）（番号順目録）」は、記載内容、形式がまったく異なっているのである。

新商品陳列所の移転新築にともない博物場は縮小され、おそらく所蔵品の大半はいわば「お蔵入り」や、先述した動物類のように「処分」される運命が予想されたであろう。所蔵品を博物場内で保管するにせよ、移管するにせよ、所蔵品すなわち府有財産をこの際にすべて明らかにしなければならない。そのため所蔵品のいわゆる「棚卸し—リアトリビュート」と「再目録化」が急務とされたのではない。わざわざ東京より専門家を招いての所蔵品の鑑定や、古銭類を除くすべての所蔵品に対応した「所蔵品出納簿番号」の併記もそれを裏付けるものである。こうして先に調査刊行されていた古銭類目録と合本した『府立大阪博物場所蔵品目録』二冊は、新商品陳列所新築に関する事務処理の一環として、おそらく内部資料（記録）的な目的も持つて急遽刊行されたのである。なお、当然のごとく前年秋に大阪市に移管された動物類は、この目録には記載されていない。

所蔵品目録刊行翌年に纏められた、文部省『大正五年一二月常置教育的観覧施設状況』には「府立大阪博物場」が記されている。「建物総計 八百三十八坪」とあり、陳列品は「古書画 三百六十八点 陶器模品 四百八十六点」などをはじめ総数一、六六四点、大正五年度経費予算として九六八円八銭、場員は場長のほか事務員四名としている。新商品陳列所建設期間中も博物場は存在していたとみるべきであろうが、「来観人員」の記載がないところからみて、閉場していたと思われる。

大正六（一九一七）年十一月に開催された新商品陳列所「落成記念展覧会」の「出品配置略図（挿図7）」を、「府立大阪博物場案内図（図版1）」と比較してみたい。場内東南にあった水禽舎などが撤去されて「発明館（機械館）」「倉庫」「荷解場」などに、南西の倉庫や事務室が「事務室（館）兼図書館」「小使室」「書庫」などになったのであろう。もし「図案館」すなわち旧美術館が移築（移



挿図7 落成記念展覧会 出品配置略図（『大阪府立商品陳列所落成記念展覧会報告』より）

動）されなかったとすれば、新築の本館は西側の正門や売品室などを撤去して、図案館を囲むように建築されたのであろう。東端すなわち松屋町筋に並行してあった売品室などは、撤去されていたと思われる⁹³。しかし東側の庭園や、北東側にあった能舞台や大広間などはほぼ残ったものと考えられ、「出品配置略図」の北東側には「博物場」と記された、それららしき建物が存在する。

また、大正六（一九一七）年八月十六日の大阪毎日新聞が、「陳列所と博物場 事実上失われし博物場は併合さるるか」と題した記事で「建築略落成し目

下内部陳列棚を取りつけつつある大阪府立商品陳列所は既記の如く十一月一日開館式を行い同時に落成記念展覧会を開催すべき——中略——又旧美術館は陳列所図案館として博物館より分離し▲又西北隅百五十余坪の敷地は懷徳堂の所有地となれるを以て府立博物館は僅に衆楽館と之に附属する能楽堂及び茶室を存するのみにて事実上その存在を失えるに等しく一見又その全部を陳列所に占領されたるの觀あり然れど府令の表面は博物館も商品陳列所も共に独立したる二箇の営造物として現に其職制を存し居れり其博物館が将来陳列所に併合さるべきものなりや否やに就ては当局者間に於ても多少の議論を存せるものの如し⁹⁴とするとおり、博物館は、新商品陳列所開所後すなわち大正六（一九一七）年以降も、極端に規模や組織を縮小されつつも存続していたと考えられる。「衆楽館」とは名称や位置からみて「府立大阪博物館案内図（図版一）」の「大広間」にあたるのではないか。

大正八（一九一九）年には先の古銭類の調査を受けて、より詳細な『府立大阪博物館所蔵古銭貨章牌類目録』が、虎僊樓商店より刊行されている。これは甲賀宣政、原田寅之助、下間寅之助らが私費を投じて作成したという。同目録には「府立大阪博物館所蔵古銭貨章牌類ハ在来ノモノ二千六百二十九個今年下間寅之助寄贈ノモノ四百六十五個合計三千九十四個アリ今回場ノ依嘱ニヨリ之ヲ類別シテ四十個ノ箱ニ陳列シ且ツ目録ヲ作りテ搜索ニ便ナラシメ陳列ノ順序ヲ以テ配列セル榻模集ヲ製シテ別冊ト為シ以テ一目瞭然タラシム」とあり、博物館の所蔵品のうち古銭類が、商品陳列所開所後も移転されず場内にあり新たに寄贈も受け、かつ展示への対策が行なわれたことを意味しよう。同目録「はしがき」を新商品陳列所所長であった山口貴雄が「博物館長」として記しているの、当時場長を兼務していたことがうかがえる。

さらに翌大正九（一九二〇）年十一月には「商品陳列所創立三十周年記念祝賀会」を衆楽館の能舞台を式場として開催していること、また同十一（一九二二）年刊行された『大阪府全志』は、博物館について「従来存したる建物の多くは撤廃せられ——中略——現在当場に附属せるは能楽堂・衆楽館及び茶室のみとなれり」としており、⁹⁷細々ながら大正後期まで博物館は存在したことは明らかである。

なお、新商品陳列所移転と期を同じくして、博物館内にはもう一つ新たな施設が設けられることになる。前記新聞記事中にもみえる「重建」懷徳堂である。懷徳堂は享保九（一七二四）年、大阪の有力町人によつて尼ヶ崎町（現中央区今橋）に設立された学問所である。⁹⁸長年町人教育に資したというが、明治二（一八六九）年廃校となった。

この復興を期して、明治四三（一九一〇）年に西村天囚らを中心とした懷徳堂記念会が設立され、翌同四四（一九一一）年十月には博物館にて「懷徳堂展覧会」を開催している。大正二（一九一三）年には財団法人化し、同五（一九一六）年に、博物館内西北の土地三六一坪を無償で貸与され、学舎を再建したとされる。これを「重建懷徳堂」という。

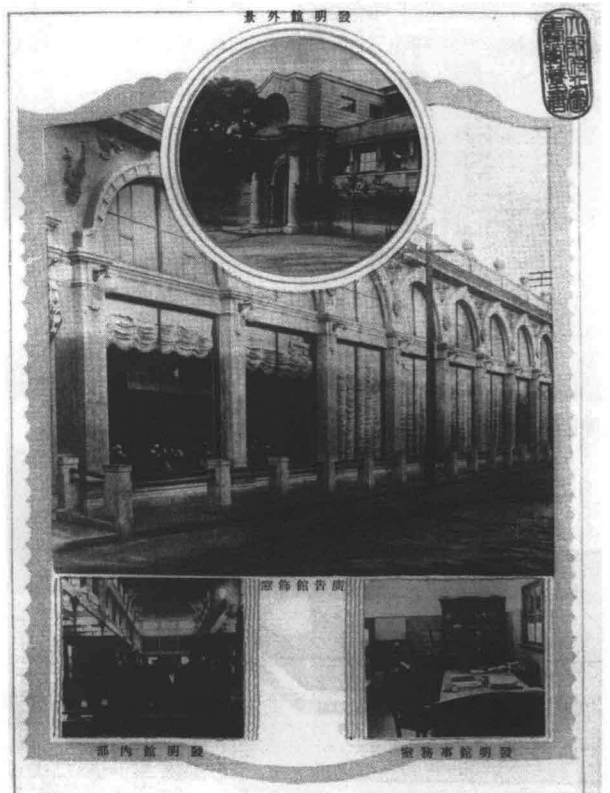
古典や人文科学、一般教養などの講義、講演を無料もしくは低額の堂費で一般市民に提供し、多くの市民に親しまれ「大阪の文科大学・市民大学の役割を果たした」とされる。大正十五（一九二六）年には、鉄筋コンクリート造三階建ての書庫・研究棟も増築した。

こうして大正五（一九一六）年以降、運営主体は異なるが、博物館敷地内に、博物館、新商品陳列所、重建懷徳堂の三施設が共存するようになったのである。

新商品陳列所は、第一次世界大戦下の好景気を受けて、活発な活動を展開している。大正七（一九一八）年五月には松屋町筋に並行した旧売品室跡に「広告館」を設置し、同年七月より九月まで「博物館所蔵古書画展覧会」を開催している。広告館は「奥行中央部八間、両翼部六間、間口五十六間、而して街路に面し奥行八尺、間口三十余間に亘りショウ、ウインドーを有する長大の建物」であった（翌年同館中央部は焼失した・挿図8）。¹⁰⁰

「大阪府立商品陳列所規則」¹⁰¹によれば、「本所ハ通商貿易ノ発達、工芸技術ノ改良、発明考案ノ奨励、産業常識ノ普及、商品広告ノ研究等総テ商工業ノ発達進展ヲ図ルヲ以テ目的」とするものであり、旧商品陳列所に比してより海外貿易指向を強めている。また「商品広告ノ研究」は旧商品陳列所にはみられないものであり、明治期の殖産興業から、より成熟した資本主義経済への対応が認められる。

博物館内の能楽堂は、大正十五（一九二六）年¹⁰²あるいは昭和二（一九二七）



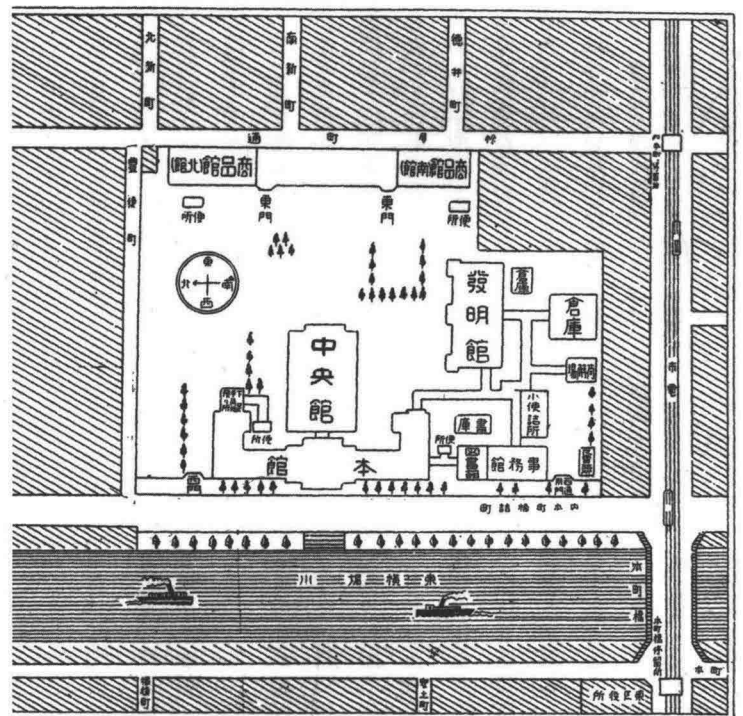
挿図8 (新)大阪商品陳列所 広告館・発明館など
(『回顧三十年』より)

103 年に大阪天満宮に移設されたという。おそらくこのころに、衆楽館・茶室も移設あるいは解体されたのではないだろうか。昭和二(一九二七)年二月発行の『最近十年間の大阪府立商品陳列所 自大正六年度至昭和元年度』の「本所敷地建物附近との関係図(挿図9)」には、それらしき建物は記されていない。

博物館について、昭和四(一九二九)年十一月号の「博物館研究」に、次の重要な記事がある。

大阪府立博物館「ママ」の虫干 大阪府立博物館は蔵品の虫干を去る十月十九日から二十一日間に亘って行った。四つの蔵のなかに書画四百八十六点、蒔絵百二十六点、仏像百四十二点の外沢山の古銭がしまはれて居るが、何れも得難い逸品揃ひ、殊に古銭は各時代を通じ丹念に蒐集され全国でも類がないと云はれて居る。何分点数が多いので一週間づつ三回に分けて商品陳列所の空室に陳列し、愛好家達を招待するのはもとより一般にも公開し、万国工業会議の代表達も来阪の際参観したとのことである。¹⁰⁵

本所敷地建物附近との関係図



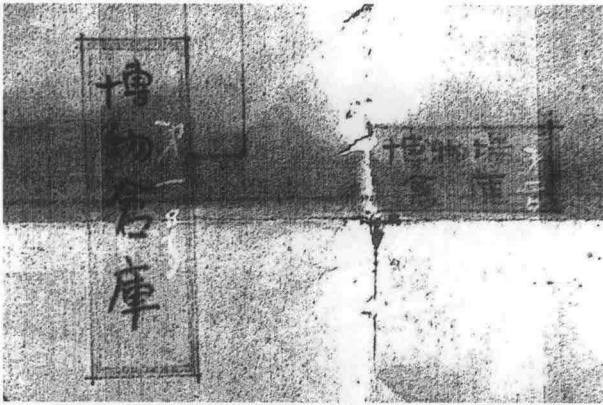
挿図9 本所敷地建物附近との関係図(部分)
(『最近十年間の大阪府立商品陳列所』より)

これにより昭和初頭に博物館所蔵品は、美術工芸品のほか古銭類も含め場内の四棟の倉庫に保管されていたことがわかる。おそらく年一回程度は、こうして新商品陳列所内の展示室で虫干を兼ねた展覧会を開催していたのではないだろうか。

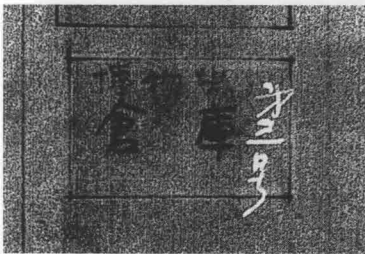
新商品陳列所は昭和五(一九三〇)年一月より名称を大阪府立貿易館と改称する。¹⁰⁶この時期に作成されたと思われる貿易館敷地図が二点現存している。「府立貿易館建物配置図 縮尺三百分之一(図版2)」¹⁰⁷および「東区豊内本町後詰町地内商品陳列所敷地実測図 縮尺三百分之一 昭和六年十一月調(図版3)」¹⁰⁸である。実測図は正確な敷地図であり、図内に「都市計画線二触レヌ土地」などがあり、地籍内の土地面積を記していることから、おそらく再開発計画のために実測作成されたのであろう。配置図はより簡易でその作成時期を欠いているが、実測図とほぼ同時期、あるいはやや先行する昭和五(一九三〇)年〜同六(一九三一)

年前半に作成されたと思われる。建物の詳細を比較すると、実測図には配置図にはない「官舎」が北東に存在するためである。なお、いずれの図面にも衆楽館・茶室の姿はみえないが、配置図には錦繍堂の右隣に「新茶室」とある。配置図は旧図案館（美術館）を「中央館」とし、実測図は「博物館」とするのはなぜであろうか。

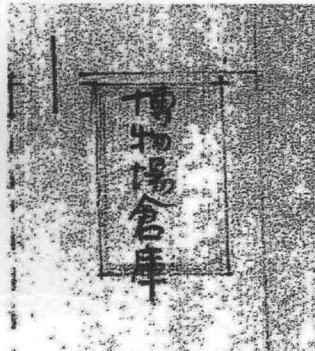
配置図（図版2・部分）には、「博物館倉庫」あるいは「博物館倉庫」と記された建物が計五棟存在している。そのうち四棟には、図面上に朱筆にて「第一号」「第二号」「第三号」「第四号」と手書で注記されている（挿図10～12）。これらの倉庫こそ、前述の「博物館研究」にある博物場の「四つの蔵」であり、おそらく昭和元（一九二六）年ごろの能楽堂移設などの際に、新築されたものと思われる。



挿図10 博物（場）倉庫第一号・第二号
(1/300)



挿図11 博物場倉庫第三号
(1/300)



挿図12 博物場倉庫第四号
(1/300)

博物場の終焉

昭和五（一九三〇）年三月号の「博物館研究」に次の記事がある。

大阪府博物館「ママ」利用問題 大阪府立貿易館附属博物館の利用については、従来屢々問題となつてゐたが、近々奈良、京都には完備せる帝室博物館のあることではあり、大阪の如き商工都市には博物館は全然不要であるとの反対論が有力で書画、陶漆器、仏像、古銭等価格に見積つて少くとも五十万円を下らぬものが、徒らに塵に埋もれて死蔵されて来たが、最近またもやその利用論が台頭し、識者間に喧伝されてゐる——中略——さしあたり問題はこれ等を陳列する適当な建物がないことであつて、貿易館当局でも、この問題さへ解決すれば、いつ手離してもをしくないと意向をもちてゐる。¹⁰⁹

この時期、貿易館（新商品陳列所）にとつて、博物場の所蔵品は明らかに「厄介者」であつたのだらう。また、おそらく管理換などによつて、所蔵品の専門的な管理者が不在となつた状況がうかがわれる。これら所蔵品こそが、博物場の最後の遺産であつた。

元大阪市立美術館長であつた望月信成は後年の回想で、「しかしこれ『博物場』は明治四十年ごろから有名無実となり、動物類は天王寺公園の動物園に移管され、能楽堂は天満天神境内に移し、美術品図書等は終戦直後まで同所の倉庫に眠つていた。しかしそれ以後は杳として行方不明になつたものがあるのは惜しい限りである。——中略——私が昭和十一年に大阪市立美術館に赴任して直後、この博物場の収納庫を調査したことがあつたが、その中には法隆寺金堂壁画の模写本を始め、仏像、仏画、屏風類、書画幅、陶磁器、漆器類など夥しく所蔵され、中には得がたいものが多い多くあつたのを覚えている」としている。¹¹⁰ ここでいう「金堂壁画の模写本」とは、旧博物場美術館の壁面や天井を飾つていたとされる壁画のことであらう。これは以下のような経緯によると思われる。

昭和十（一九三五）年、皇紀二千六百年を記念して、貿易館を取り壊し博物

場の地に「国際見本市会館」を新築することが決定した。¹¹¹その規模は「鉄筋鉄骨地下室共七階建延坪一万二千坪」という壮大なもので、昭和十五（一九四〇）年までの完成を目指すものであった。¹¹²

昭和十一（一九三六）年には「現在の府立貿易館の取壊し費、設計費一部工事等に要する十万円を本年度分として支出」し、同年末には住友合資より二〇万円の寄付を得たという。¹¹⁴翌十二（一九三七）年四月に、貿易館事務所は敷地内北東の府立産業会館に移るとあり、¹¹⁵同年五月までには第一期工事に着手したらしい。

おそらくこのころに、貿易館中央館すなわち旧博物場美術館が取り壊されたのであろう。美術館天井画について、同年四月十六日付の新聞記事があり、「博物場が府立貿易館の一部商品展示館となり、時の移るのとともに管理者も変わって顧みられなくなつてゐたが、国際見本市会館建設のため同館建物を全部取壊してゐるうちハタとこの大作のある中央館にぶつかり——中略——大阪女子医専より講堂の天井に欲しいといつて来てゐます」とあるように、この天井画、壁画は同年十一月に完成したとされる大阪女子高等医学専門学校（現関西医科大学）の講堂に移設され現存している。¹¹⁷壁画は大阪女子高等医学専門学校に移される数ヶ月間、「博物場の収納庫」にあり、望月はそれを見たのであろう。

その後見本市会館は、「地下1・2階および1階の鉄骨組立が完了したとき、日支事変の長期化のため、工事は中止となつた」という。¹¹⁸中止の時期は明らかではないが、おそらく昭和十三（一九三八）年四月の、国家総動員法制定直後あたりではないか。

この工事に際し、博物場倉庫群も移転あるいは撤去された可能性はあるが、おそらくそのまま敷地内に残されていたものと考えたい。先述した望月の「美術品図書等は終戦直後まで同所の倉庫に眠っていた」という回想、府立産業会館に移った貿易館事務所が、昭和十七（一九四二）年六月に他組織と統合され、翌十八（一九四三）年三月に「大阪南方院」と改称された後も、同敷地内で終戦まで活動していたこと、¹¹⁹重建懷徳堂も終戦まで同地にあったことなどより、敷地周縁にあった建物は、戦後まで解体されずに残されていたと思われるためである。先述した配置図（図版2）を見ればわかるように、博物場倉庫群はい

ずれも敷地の周縁近くに位置しており、四棟すべて残されたかは不明であるが、その多くは残されていた可能性が高い。

また、本稿「はじめに」でふれた大阪博物場主催の『昭和13年3月21日〜25日、第二回郷土陶磁器展覧会目録』の存在も、この時期まで博物場倉庫が所蔵品と共に残されていたことを予想させるものである。

この後、戦争の激化などにより、博物場倉庫と所蔵品は、移転されず旧貿易館敷地内に放置されていたものと思われる。博物場（倉庫）の最期は、昭和二〇（一九四五）年の大阪大空襲によるものであったと考えられる。

重建懷徳堂は、昭和二〇（一九四五）年三月の大阪大空襲で、鉄筋コンクリート造の書庫・研究棟のみを残して焼失したという。これはおそらく同月十三日深夜より翌未明にかけての第一回大阪大空襲によるものであろう。浪速区・西区・南区（現中央区）・港区を中心に被害を受け、旧貿易館敷地のある東区（現中央区）も類焼した。

一方、産業会館の大阪南方院（旧貿易館事務所）は、昭和二〇（一九四五）年六月七日の第三回大阪大空襲で一部罹災し、同年十月、産業会館は連合軍に接収され、「隣接の農業会館（現在の商工会議所の処にあった）に移」つたという。¹²¹現在の大阪商工会議所（本部）の位置関係よりみて、農業会館とは配置図（図版2・部分）の中央上部にある「府立実業会館」のことと思われる。すなわち、同敷地東側に存在した産業（会）館および実業会館は、空襲により多少罹災しながらも、戦後まで同地に存在していたと考えられる。

これらを信ずれば、旧貿易館敷地は、昭和二〇（一九四五）年三月に、重建懷徳堂のあった西側がまず罹災し、同年六月には東側も一部罹災したが、かなりの建物が戦後まで残つたと想像される。

あらためて配置図（図版2・部分）にある博物場倉庫の位置を確認したい。第一号および第二号は懷徳堂倉庫（書庫など）より「府立産業能率研究所」を挟んだ北端東寄りに、第三号は南端中央に、第四号は東南端に位置する。北側に位置した重建懷徳堂および産業会館が罹災していることからみて、第一号および第二号は第一回あるいは第三回大阪大空襲時に罹災した可能性が高い。また第三号および第四号、とくに第四号は罹災しなかった可能性があるものと思わ

れる。

こうした仮説を補強するものが、現存する博物館旧蔵とされる所蔵品である。現在、所在の明らかな所蔵品としては、大阪府教育委員会所蔵の美術工芸品および貨幣類、大阪市立自然史博物館所蔵の貝石資料がある。現存美術工芸品のうち、陶器は土器なども合わせ四〇二点を数えるが、これは『府立大阪博物館所蔵品目録』の「器具甲乙之部 陶器」にある四八六件、七〇三点の¹²³2/3に近い数である。また、貨幣類は四〇箱に納められた三、〇九四点が完存している。¹²³

貝石資料は木村兼葭堂旧蔵とされるものであり、『所蔵品目録』にある「鉱石類及貝類 三七箱」の一部にあたるものとされる。昭和四九（一九七四）年に大阪市立自然史博物館に寄贈される前は京都大学理学部地質学教室にあったという。この資料の来歴について、「太平洋戦争たけなわなる時、大阪方面から、この標本は非常に大切なものであるから、しばらく預かってほしい、と持ってきた」との伝承がある。¹²⁴

これらより想像すれば、所蔵品は四つの博物館倉庫に所蔵品目録に準じ分類、分散して保管されており、現存する所蔵品は、先述した昭和二〇（一九四五）年三月あるいは六月の大阪大空襲の際に、罹災あるいは全焼をまぬがれた（おそらく第四号）倉庫にあったものと思われる。憶測すれば、貝石資料は罹災した他の倉庫より、その一部が救い出されたものではないだろうか。

所蔵品目録で三五二件を数える「絵画」のうち、現存するものは「重要文化財 木村兼葭堂像 谷文晁筆」を唯一とすることなど、五六二五件の所蔵品のうちわずかな数のみ現存することからみて、博物館倉庫のほとんどは罹災、焼失し、大部分の所蔵品も運命を共にしたのであろう。

おわりに

以上、七十年にわたる博物場の盛衰、とくにその衰退期について明らかにした。

博物場の歴史とは、「明治前期における博物館の中で、吸収合併することにより総合的な博物館となり発展する施設」が、明治後期以降、その総合的機能を漸次喪失していったものといえよう。その転換点は、やはり明治二三（一八九〇）年の大阪商品陳列所の設置であろう。これにより博物場は、教育的色彩を強めたが、明治後期の重工業化や国際通商振興の一環より外されたとみることもできよう。

続いて本稿ではあまりふれなかったが、明治三六（一九〇三）年の「第五回内国勸業博覧会」の博物場への影響も大きかったであろう。当時最先端の近代的、国際的な大博覧会の開催は、大阪市民の展覧会や娯楽についての意識を一変させたと思われる。また同博覧会により、この後大阪の大イヴェントは天王寺地区に集中するようになる。

博物場はもはや前時代的な施設と認識されたであろうが、「四時の花に憧憬れる老若、山野の動物を喜んで来る子女等群を成し、その他鶯の会、繡眼兒の会、金魚の会、朝顔の会、牡丹・菊の会、抹茶の会、琴・舞の温習会、素義会等こゝに持ち込まれて賑ひをなし」とあるとおり、近世以来の伝統的、守旧的な娯楽の場として、明治末期にも多くの市民に愛され続けたのである。

大正期に入ると、ルナパークの開園や活動写真の勃興などによって、より近代的な大衆娯楽施設が誕生する。さらに百貨店の誕生と発展により、博物場の存在は徐々に忘れ去られていったであろう。大正四（一九一五）年の大阪市民博物館および大阪市立動物園の開設、同六（一九一七）年の新商品陳列所の開設は、博物場の社会的機能の終焉を告げるものであった。大正四（一九一五）年の『府立大阪博物館所蔵品目録』の口絵に掲げられた、近世の面影を色濃く遺した正門（西門）の写真（挿図13）は、失われゆく博物場へのオマージュなのであろう。

「衆楽館（集会場）・能楽堂・茶室」は、熱心な愛好家の憩いの場として残されたのであろうが、それらも昭和初頭に移転、廃された。所蔵品のみが倉庫に眠ったが、大阪大空襲でそのほとんどが灰燼に帰したと思われる。

博物場は明治・大正・昭和という、半世紀以上にわたるわが国の急激な近代化の過程の中で、さまざまな外因に耐えつつ、その機能を変容させ存続してき



挿図13 府立大阪博物館西門（『府立大阪博物館所蔵品目録 第一巻』より）

たといえる。このような存在は類例のないものであり、前近代的で未分化な博物館（群）像として安易に片付けることはできない。

博物館は何より常に市民に開かれた、「自由な場」であつたことに注目すべきである。「殖産興業」や「富国強兵」といった大義名分を背景化することによって、あるいは背景化されたことによって、博物館はその自由を保ちえた。数々の国家的な大イヴェント

は、その頭上を越え、より近代的、専門的な他所で行われた。さらに近代化に取り残されたことにより、資本主義的、商業主義的な大衆娯楽の誘惑からも隔離された、まさに「聖域—楽園」でもありえたのである。

博物館の終焉期が、わが国が昭和恐慌を経て国家総動員体制から軍国主義化していく時代にあるのは、偶然ではない。「楽園」としての博物館は、「非常時」という時代下に排除されたといえる。博物館は、わが国のベル・エポックと共にあつたのかも知れない。

註

1 博物館は、明治八（一八七五）年には大阪博物館、明治十二（一八七九）年より公立大

- 2 阪博物館、明治十七（一八八四）年より府立大阪博物館あるいは大阪府立博物館と名称を変更するが、「博物館」と統一した。
- 3 椎名仙卓 一九八九「博物館事始め（41）公立大阪博物館と類似施設の合併」博物館研究 二四巻九号 二〇頁（※以下、引用文中などの「」内は筆者の補註である。旧漢字、歴史的仮名遣いは改めたものもある）
- 4 近畿大学短大論集 十一巻二号、同 一九七九「大阪府立大阪博物館の考察（2）—明治期公立博物館の活動—」十二巻二号、千地万造編 一九八三「大阪府の博物館—中央公論美術出版、大阪府教育委員会 一九九一「府立大阪博物館旧蔵美術工芸品目録」大阪府教育委員会 ほか。
- 5 河原正彦 一九九一「府立大阪博物館」所蔵の陶磁器」『府立大阪博物館旧蔵美術工芸品目録』大阪府教育委員会 一三〇頁
- 6 向井正博 二〇〇三「大阪府の文化行政と博物館」市政研究 一四一号 三一—三二頁
- 7 橋爪紳也 一九九五「にぎわいを造る 近代日本の空間プランナーたち」長谷工総合研究所 十四—十九頁
- 8 近畿大学短大論集 十一巻二号 一一四頁
- 9 金山喜昭 二〇〇一「日本の博物館史」慶友社 一二〇頁
- 10 大阪市役所編纂 一九三四「明治大正大阪市史 第六巻法令編」日本評論社 四五四—四六〇頁
- 11 桒上衛 一九七九「大阪府立大阪博物館の考察（2）—明治期公立博物館の活動—」十二巻一號 一六一—一六八頁
- 12 註九前掲書 四六〇—四六一頁
- 13 大阪市役所編纂 一九三四「明治大正大阪市史 第一巻概説編」日本評論社 六六八頁
- 14 註七前掲書 二二九頁
- 15 註十二前掲書 六六八—六六九頁
- 16 「大阪府教育委員会編」一九七一「大阪府教育百年史 第二巻史料編」大阪府教育委員会 五〇八頁
- 17 「大阪府編」一九〇三「大阪府誌 四編財政 教育 衛生 慈善 警察 土木並交通機関」大阪府 一二七頁
- 18 註十二前掲書 六六九頁
- 19 註九前掲書 六〇六—六〇八頁
- 20 註十二前掲書 六六九頁
- 21 椎名仙卓 一九八八「日本博物館発達史」雄山閣出版 五六頁
- 22 註十五前掲書 二七九—二八〇頁
- 23 註十六前掲書 一四四—一四五頁
- 24 註七前掲書 一三六—一三七頁

- | | |
|----|---|
| 24 | 註二前掲書 二二頁 |
| 25 | 註十二前掲書 二五〇～二五一頁 |
| 26 | 註十二前掲書 二五一～二五二頁 |
| 27 | 註九前掲書 九二三頁 |
| 28 | 註十二前掲書 二五二～二五三頁 |
| 29 | 註九前掲書 八三〇頁 |
| 30 | 同註二九 |
| 31 | 読売新聞 明治十七年九月十四日、読売新聞 明治十七年十一月十二日 |
| 32 | 大阪市東区法円坂町外百五十七箇町区会編 一九四〇 『東区史 第二巻行政篇』 大阪 |
| 33 | 市東区役所 一〇四七頁 |
| 34 | 大阪市東区法円坂町外百五十七箇町区会編 一九四二 『東区史 第一巻総説篇』 大阪 |
| 35 | 市東区役所 六六〇頁 |
| 36 | 註三三前掲書 六五八・六五九頁間挿図 |
| 37 | 註三三前掲書 六五八頁 |
| 38 | 『大阪府教育委員会編』 一九七三 『大阪府教育百年史 第一巻概説編』 大阪府教育委員会 八九〇頁 |
| 39 | 大阪市東区法円坂町外百五十七箇町区会編 一九四一 『東区史 第四巻文化篇』 大阪 |
| 40 | 市東区役所 五五四～五五五頁 |
| 41 | 註三七前掲書 五五五頁 |
| 42 | 註七前掲書 一三〇頁、註三六前掲書 八九三頁 |
| 43 | 註六前掲書 一二～十九頁 |
| 44 | 『大阪府立商品陳列所編』 一九二〇 『回顧三十年』 大阪府立商品陳列所創立三十周年記念協賛会 三～四頁 |
| 45 | 大阪府『編』 一九八八 『大阪府立貿易館のあゆみ』 大阪府商工部ソフト産業振興課 五五頁 |
| 46 | 大阪商品陳列所『編』 一九〇一 『府立大阪商品陳列所十年紀要』 府立大阪商品陳列所 十六～十九頁 |
| 47 | 註四一前掲書 九頁 |
| 48 | 註四一前掲書 十頁 |
| 49 | 『大阪商品陳列所の開場式』 読売新聞 明治二三年十一月十八日 |
| 50 | 註四三前掲書 三～四頁 |
| 51 | 『大阪商品陳列所』 読売新聞 明治二四年六月四日 |
| 52 | 註三七前掲書 五五六～五五七頁 |
| 53 | 『全国醬油品評会』 読売新聞 明治二七年四月二三日 |
| 54 | 『写真展覧会大阪支会発会式』 読売新聞 明治二七年八月十日 |
| 55 | 『分捕品の見物半日に二万余人』 読売新聞 明治二七年九月十一日 |
| 56 | 高橋敬藏 一九六〇 『大阪と知事さん(13)』 大阪府職員時報 十四～十三三 |
| 57 | 三四頁 |

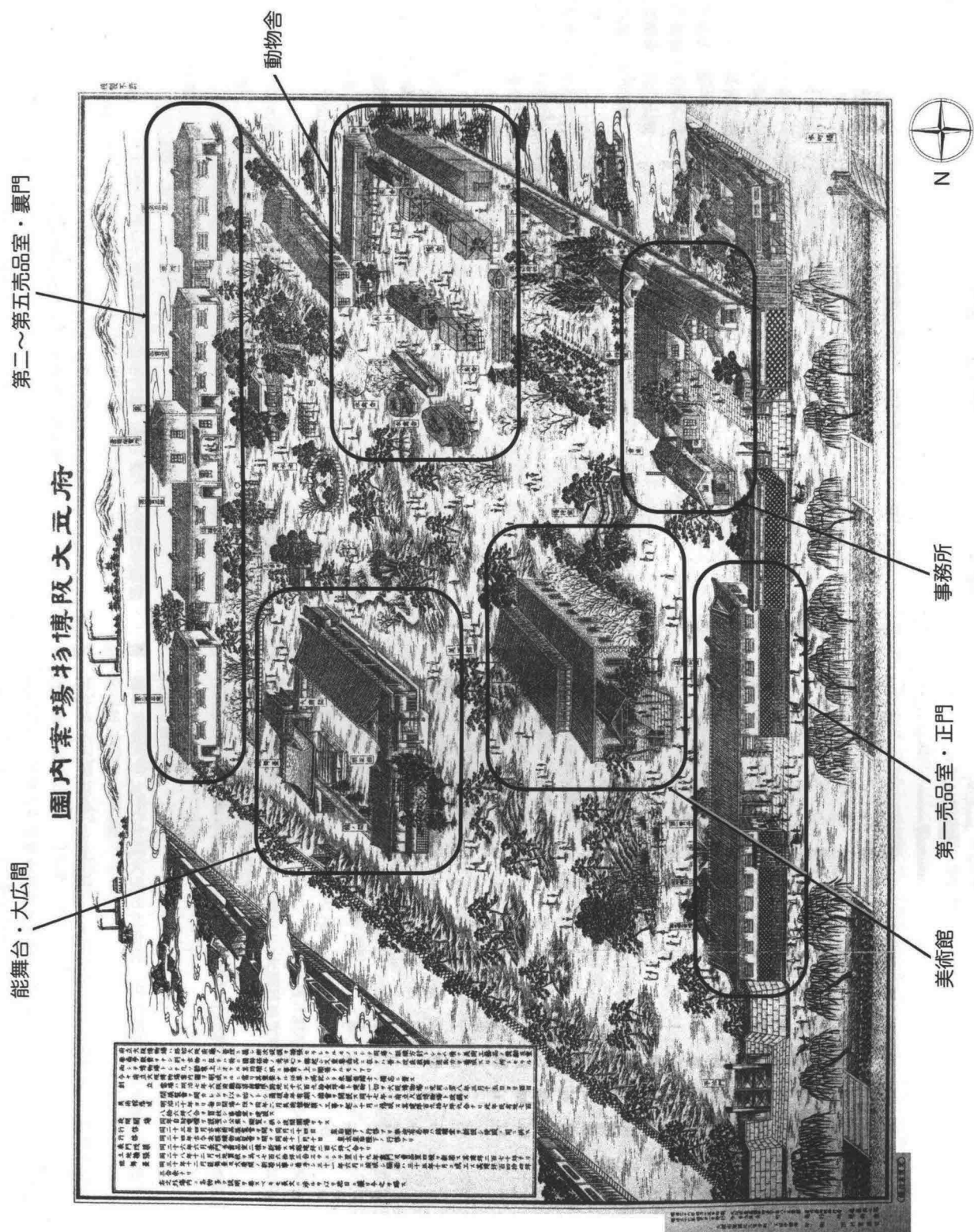
- 品目録』および『電信案内』 大阪通信管理局 と合本されている)
 84 註四一前掲書 三三〇三三頁
 85 『大阪府立貿易館編』 一九七〇 『八十年のあゆみ』 大阪府立貿易館 八〇〇八二頁
 86 註四一前掲書 二九頁
 87 註七前掲書 一三九頁
 88 『府立大阪博物館編』 一九二五 『府立大阪博物館所蔵品目録 第一巻』 大阪府立博物館
 89 『府立大阪博物館編』 「一九一五」 『府立大阪博物館所蔵品目録 第二巻』 『府立大阪博物館』
 90 久米雅雄 一九九八 『府立博物館』の沿革と〈貨幣資料〉の収蔵および保管』 大阪府教育委員会編 一九九八 『府立大阪博物館旧蔵貨幣図録 第一冊』 大阪府教育委員会 二〇三頁
 91 註六九前掲書 一三四一三六頁
 92 『大阪府立商品陳列所編』 一九一八 『大阪府立商品陳列所落成記念展覧会報告』 大阪府立商品陳列所落成記念展覧会 図版
 93 『大阪商工界の生きた図書館 竣工した大阪商品陳列所』 大阪朝日新聞 大正六年四月二六日
 94 『陳列所と博物館 事実上失われし博物館は併合さるるか』 大阪毎日新聞 大正六年八月十六日
 95 府立大阪博物館編 一九一九 『府立大阪博物館所蔵古銭貨幣類目録』 虎僊樓商店
 96 『大阪府立商品陳列所創立三十周年祝賀会 式場は衆楽館の能舞台来賓約一千名参列』 大阪毎日新聞 大正九年十一月十六日
 97 井上正雄 一九二二 『大阪府全志 卷之二』 大阪府全志発行所 二九二頁
 98 湯浅邦弘編 二〇〇一 『懷徳堂事典』 大阪大学出版局 参照
 99 註九八前掲書 二〇五頁
 100 註四一前掲書 三六〇三九頁
 101 註四一前掲書 四八〇五〇頁
 102 註十二前掲書 六七三頁、註五九前掲書 六八頁
 103 奥富利幸 二〇〇三 『大阪博物館能舞台―初期博覧会場の能舞台』 日本建築学会大会学術講演梗概集 F12分冊 六五六頁、註五五前掲書 八三頁
 104 『大阪府立商品陳列所編』 一九二七 『最近十年間の大阪府立商品陳列所 自大正六年度至昭和元年度』 大阪府立商品陳列所 図版(※本図では懷徳堂も省略されているため、旧博物館施設も省略された可能性がある)
 105 博物館事業促進会 一九二九 『大阪府立博物館の虫干』 博物館研究 二卷十一号
 106 註八五前掲書 一〇一〇二頁
 107 『府立貿易館建物配置図 縮尺三百分之一』 青図 六六×七八cm 大阪府立中之島図書館蔵

- 108 『東区(※内本町、新町、南町)地内商品陳列所敷地実測図 縮尺三百分之一 昭和六年十一月調』 青図 七九×一一四cm 大阪府立中之島図書館(※本図は博物館より同図書館に寄贈されたものである)
 109 博物館事業促進会 一九三〇 『大阪府博物館利用問題』 博物館研究 三卷三号
 110 望月信成 一九七三 『大阪の文化財 毎日放送文化双書3』 毎日放送 二五四、二五五頁
 111 註八五前掲書 一〇八頁
 112 『国際見本市会館具体案を決定 三百六十万円を投じ本町に出現する商品大殿堂』 大阪時事新報 昭和十年七月四日
 113 『商都の待望を実現明春早くも着工』 大阪時事新報 昭和十一年九月六日
 114 『日本一の見本市会館 東京オリピック迄に貿易会館跡にまず住友から二十万円寄附』 大阪毎日新聞 昭和十一年十二月十二日
 115 同註一一
 116 『龍へ何処へ行く 忘れられた五十年前の大作』 大阪毎日新聞 昭和十二年四月十六日
 117 註三七前掲書 五六〇頁
 118 同註一一
 119 註八五前掲書 一〇九一二〇頁
 120 註九八前掲書 二〇〇頁
 121 註八五前掲書 一一〇頁
 122 註四前掲書 一七頁
 123 註九〇前掲書 例言
 124 梶山彦太郎 一九八二 『木村兼霞堂蒐集と推定される貝類標本について』 『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 14 木村兼霞堂貝石標本』 大阪市立自然史博物館 一九〇二二頁

※最後になりましたが、調査にご協力いただきました、大阪府立中之島図書館、大阪歴史博物館、同館学芸員・井上智勝氏および図版画像処理にご協力いただきました、本学文化財保存修復研究センター研究員・岡本篤志氏の各位に、心より御礼申し上げます。

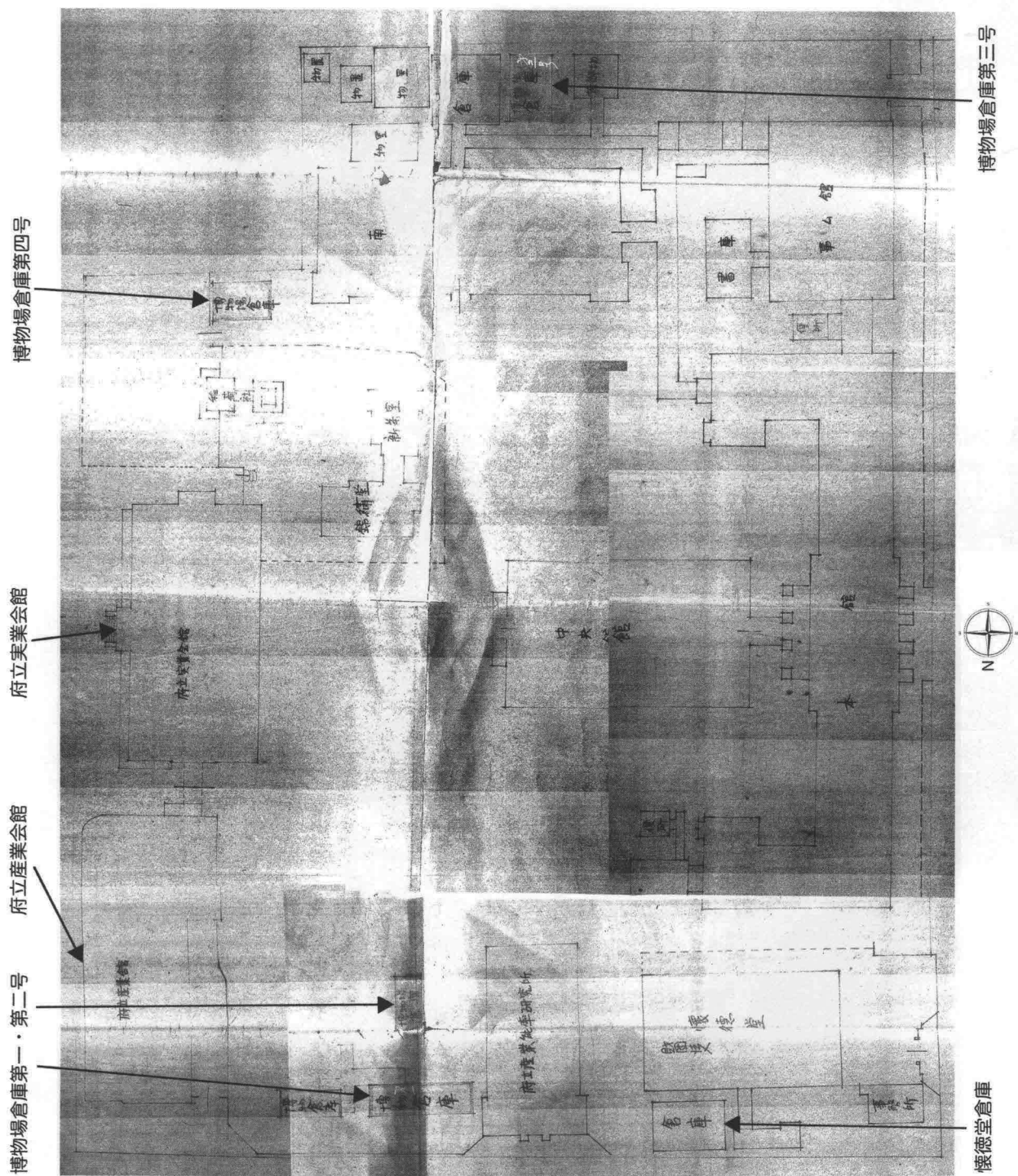
執筆者

後々田寿徳 学芸員課程
 GOGOTA Hisanori Curator Program
 専任講師
 Lecturer

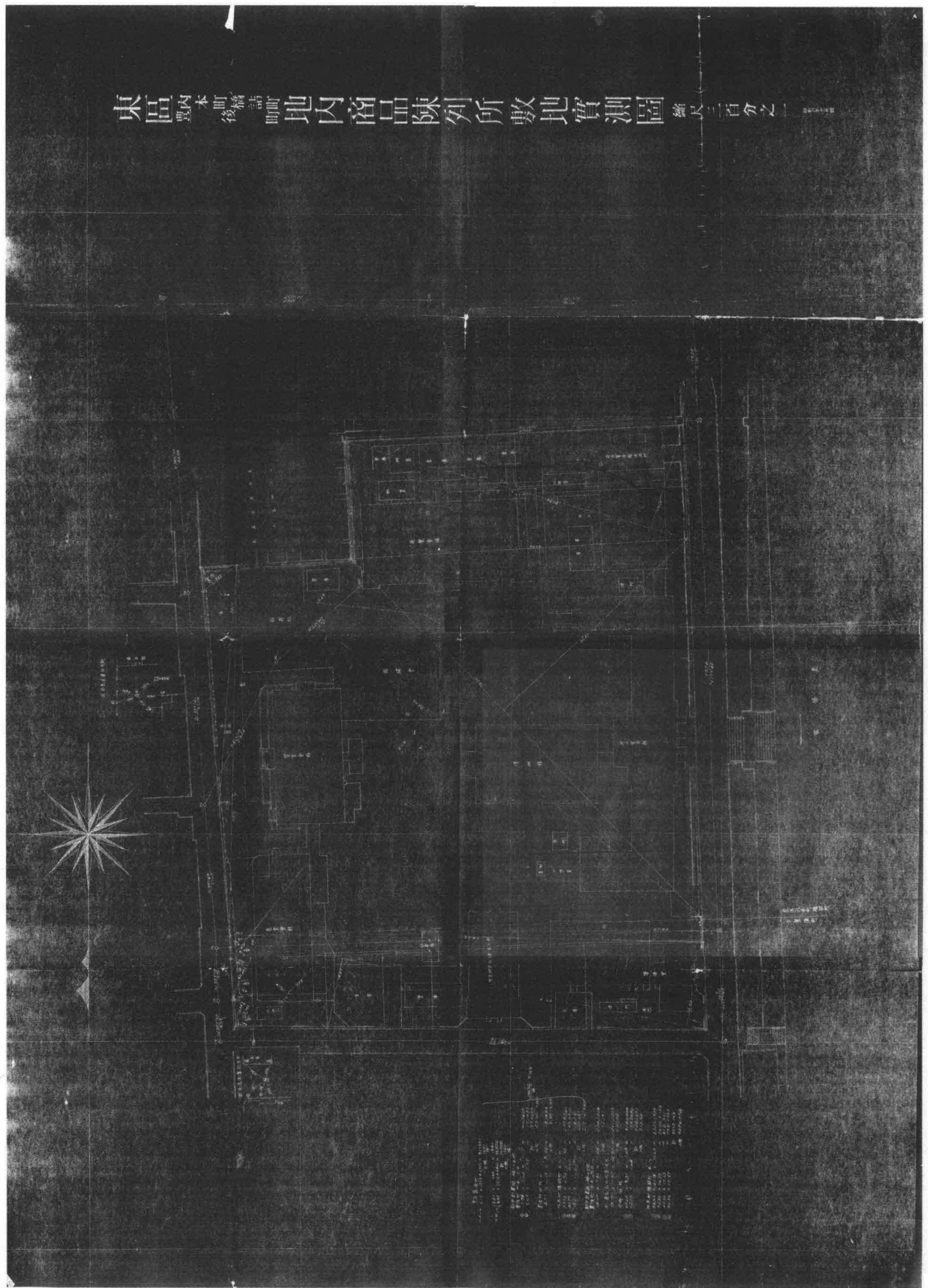


図版 1 府立大阪博物館案内図（明治36年）（『東区史』より）

図版2 府立貿易館建物配置図 (大阪府立中之島図書館蔵)



図版 2 ・ 部分 府立貿易館建物配置図 (部分)



図版3 東区豊本町後詰町地内商品陳列所敷地実測図 (昭和6年) (大阪府立中之島図書館蔵)

Osaka Museums Park —Vicissitude of a "Paradise"

GOGOTA Hisanori

Osaka Museums Park was established in 1875 and became in the middle of the Meiji era a museum complex to which the museum, the merchandise sample and commercial showroom, the botanical garden and the zoo, etc. were attached. The comprehensive function was gradually lost since the latter term of the Meiji era. The turning point might be an installation of the "Osaka Commercial Museum" in 1890. As a result, Osaka Museums Park developed its entertaining and educational characteristic. On the other hand, it was excluded from the part of the heavy industry and the international trade promotion at the latter term of the Meiji era.

Although Osaka Museums Park gradually became the remains of former times, it was continued to be loved by many citizens in the end of the Meiji era as a traditional and conservative place of amusement since the early modern age.

Osaka Museums Park sees its end in social functioning because of the establishment of the "Osaka Municipal Museum" and the "Osaka Municipal Zoo" in 1915 and of the opening of the new "Osaka Commercial Museum" in 1917. The existence of the Osaka Museums Park was gradually passed into oblivion.

A part of the Osaka Museums Park was left as a place to relax by ardent fans, but it was eliminated in the early part of the Showa era. It seems that the collection kept in four storages, was almost reduced to dust by Great Osaka Air Raids in 1945.

Osaka Museums Park left behind by the modernization, had nothing to do with national policy like "encouragement of new industry" or "wealth and military strength" and became "paradise" open to citizens, being different from capitalistic and commercial entertainment. The period of end to the Osaka Museums Park marks an age from national mobilization to militarism through the Showa Depression.